

## 比較文化論 : 大項目別報告 : 鍛冶・金属加工 2700

著者	田村 克己
雑誌名	国立民族学博物館研究報告別冊
巻	011
ページ	101-105
発行年	1990-03-10
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00003650">http://doi.org/10.15021/00003650</a>

## 鍛冶・金属加工 2700

田 村 克 己\*

1. フイゴの諸形式の分布

2. 製鉄技術(2701)と職業的鍛冶屋(2702)

### 1. フイゴの諸形式の分布

鍛冶・金属加工の諸項目の中で、分布が過去に論ぜられ、今回も多く資料のみられるのは、フイゴの問題である [FORBES 1964: 110-117; 村上 1970]。それゆえ、まずフイゴの諸形式の分布を見てみよう。

フイゴの形式は、皿フイゴ、皮フイゴ(2705)、ポンプフイゴの三つに大別される。ポンプフイゴのうち、垂直式のものがマレー式フイゴ(2703)であり、水平式のものが箱式フイゴ(2704)である。大まかにいって、マレー式フイゴ、箱式フイゴは、それぞれ、東南アジア、東アジアに特徴的な形式であり、隣接した分布域をもつ。さらに両者が同じピストンの原理を用いたものである以上、両形式の間に歴史上・系統上の関連を想定するのは、自然といえよう。

両者の分布をあらためて見ると、マレー式フイゴは、マダガスカルや台湾をふくめ、東南アジア島嶼部に濃厚に分布し、さらに Burmese を経て、ナガ・チン系諸族に見られ、またモン＝クメール系山地民(Wa, Lamet, Nya Hon)などの間に点在する。この分布状態は、マレー式フイゴが東南アジアの古い形式のフイゴであるという従来の考えを確認している。他方、箱式フイゴの分布は、中国西南部と東南アジア大陸部にかけての山地民の4例(Lisu, Nu, Tulung, Laos Thai Miao)およびナガ系の2例(Ao Naga, Konyak Naga)のみであるが、従来の知見にしたがえば、中国・日本などの東アジアから、インドシナにかけて連続してみられる<sup>1)</sup>。このことは、箱式

\* 国立民族学博物館第2研究部

1) ハイネ＝ゲルデルン(Heine-Geldern, R.)は、後印度東部(トンキン、安南、カンボジア、ラオス諸州)とともに、ジャワ島にも分布するという[1942: 280]。またクローゼマン(Klosemann, K.)による「フイゴの型とその分布」[FORBES 1964: Fig. 23]を参照。同図は、中間段階の報告書[大林編 1985a: 77]に掲載してある。

フィゴが、マレー式フィゴより後に、中国からの影響下で、東南アジアに浸透していったことを示している。

さきにものべたように、マレー式フィゴと箱式フィゴとの間に、それらの起源の上で何らかの関連をみるのは自然であり、この点について、すでにつぎのような考えがある。

「……さし当っての仮設的なポンプふいご《マレー式フィゴ》の発生地として、中国南部からインドシナ半島にかけて、かつて分布していた越文化圏を有力視したい。おそらくこの一帯は、竹を素材とする発火器の伝統を古くから持っていたと考えられ、それに北方系の単独型皮フィゴが接触して生れたのが、ポンプふいごの原型ではあるまいか。中国のふいごが吹差ふいご《箱式フィゴ》に推転していった過程に、ポンプふいごが気づかっていたことは、既に述べたとおりであるが、この現象を説明するためにも、中国南部にポンプふいごの存在を想定することは、合理的な仮設である。」  
[村上 1970: 36, 《 》は筆者]。

ニーダム (Needham, J.) も、中国の箱式フィゴの起源における、ピストン式ライター——上にいう竹を素材とする発火器、すなわち発火ポンプ (2907) ——の重要性を指摘し、それが、東南アジアのものであり、「雲南でも土着のものとして」あり、さらに「古代中国文化圏のマラヤ=インドネシア=オセアニア地域の交易財の一部をなしたと考えることができるならば、中国のピストン=フィゴ《箱式フィゴ》が、ともかく作業仮設としてはそれに起源を持つものであることも十分ありうる」とする。そして、「ピストン=フィゴは東アジアのもっと原始的な文化では、例えばラオスのカオ族《カー族か》や安南のモイ族が使用する対になった形のもの [すなわちマレー式フィゴ] に見られるように、かなり広く見られる」ことを理由に挙げている [ニーダム 1978: 189, 《 》は著者]。

これらの説はいずれも、ポンプ=フィゴの起源を発火ポンプに求めている。ポンプ=フィゴの2形式のうち、構造や形態の面から発火ポンプにより近いのはマレー式フィゴであり、箱式フィゴは、同時に空気の押し出しと吸い込みをするポンプの働きによって、連続送風の可能な、より「発達」したものである。(マレー式フィゴの連続送風は、一対のフィゴから交互に風を送ることによってえられる)。それゆえ、発火ポンプから直接的に発生したものとして、マレー式フィゴを考えるのは自然であろう。

上述のように、村上は、この過程に皮フィゴとの接触をのべ、発生地として中国南部からインドシナ半島にかけてを挙げている。皮フィゴは、東西ユーラシアから北アフリカにかけ広汎に分布し、アジアでは、北・中央アジアからインド (南部を除く)

へとひろがってる。その東南アジアとの接点は、中国南西部からビルマ北部・アッサムにかけての一带と考えられる。しかし、今回の分布図で、皮フィゴは Burmese に記されているのみである<sup>2)</sup>。また発火ポンプも、Iban でしか報告されていない。それゆえ、マレー式フィゴの発生に関する問題は、先の推論以上に立ち入ることができない。

つぎに、マレー式フィゴと箱式フィゴの関係についてどうであろうか。このことで興味深いのは、両者の併存する Ao Naga の例である。この箱式フィゴは、水平式のピストンで連続送風の可能な点では同様であるが、円筒形で、両端のおおわれた木筒であり、ちょうどマレー式フィゴを横にしたような形をしている。同様のものは、メコン川溪谷の Miao にもみられるという [MILLS 1926: 98 及び同頁見開き図]。更に、Tulung の「怒江様式」とよばれるフィゴは、同様に、中空の樹幹の両端を木の蓋でおおい、細い木の棒で風を送るとある [雲南省編纂委員会編 1981: 58]<sup>3)</sup>。

このような「円筒形」箱式フィゴの存在は、何を意味しているのだろうか。先にあるように箱式フィゴの発生にマレー式フィゴの影響を考えるならば、この形式は両者の中間的段階であろうか。実際に中国の箱式フィゴの発生は明らかでない点が多く<sup>4)</sup>、この問題につきおおいに示唆的である。しかし、このことはなお慎重を要すると思われる。というのも「円筒形」箱式フィゴは、構造一機能の上から、中国の箱式フィゴの一変型とみなすことができるからである。ハイネ＝ゲルデルンも、「円筒形のもあれば四角形（箱形鞆）のもある両側の閉じられた唧子鞆は、支那から由来したものと既に述べている [ハイネ＝ゲルデルン 前掲]。いずれにしろ、「円筒形」箱式フィゴの存在は、中国と、東南アジア山地民（中国南部・アッサムを含む）との間の鍛冶の技術の伝播の問題を考えるにあたって、一つの手がかりとなるであろう。

フィゴについてのもう一つの問題は、踏みフィゴ（2706）の分布である。上述のフィゴの3形式が、材料と形態において分類されるのにたいし、踏みフィゴは、フィゴの動力に足を用いる点に注目したものである。踏みフィゴは皿フィゴにともなうこと

2) 皮フィゴは、アチェ地方、ジャワ島、ロンボク島、トンキン高地のヤオ族にも分布が報告されている [ハイネ＝ゲルデルン 1942: 280; 村上 1970: 17-18]。これらを、ハイネ＝ゲルデルンは、印度人やアラビア人によってもたらされたものとする (Yao については北方からの影響を述べているが)。他方、村上は、18世紀前半に報告された西南夷、古宗の皮フィゴを挙げ、中国西南部から東南アジアへ南下する流れを考えている。

3) Tulung には、もう1種類、「竹制風箱」すなわちマレー式フィゴのあることが報告されている。なお、Nu, Lisu において「風箱」とのみ記されているものが、このようにマレー式フィゴである可能性も考えられる。ただ一般的に、「風箱」は箱式フィゴを意味する。

4) 箱式フィゴの存在が知られているのは、宋代、おそらく10世紀において確実である。ニーダムは、文献の記述から、その存在を漢代やそれ以前に読みとろうとしている [ニーダム 1978: 186-187, 207]。

が多いが、皿フイゴのアジアでの「代表的な遺存地域は、インド、それもおおむね北緯20度から南、種族的にはドラヴィダ族、ムンダ族というインドの基層的な種族分布と一致して」おり、「動力が足であること、ふいごの操作にバネの原理を巧みに取り入れていること」の特徴をもつという [村上 1970: 44]。こうした足踏みの皿フイゴは、アッサムの Khasi やカンボジア北東部の Kui に分布することが既に知られている [ANDREE 1884: 73-75, 98-101]。今回の分布図では、スラウェシの Bugis, Makassarese の例が加わっている。それらはマレー式フイゴと結びついているが、ボルネオの Dayak にバネの原理を用いたマレー式フイゴの存在すること [ハイネ＝ゲルデルン 前掲] をあわせ考えると、東南アジアの鍛冶の技術に、今ひとつの流れを想定することが可能かもしれない<sup>5)</sup>。

## 2. 製鉄技術 (2701) と職業的鍛冶屋 (2702)

つぎに、製鉄技術 (2701)、職業的鍛冶屋 (2702) の問題をふれてみたい。金属器技術がヘスペロネシアン諸民族の居住域をほぼその東限とすることは一般にいえるところであるが、インドネシア東部にあつて、具体的にどこまでおよんでいるのであろうか。

製鉄技術は、スラウェシ島の諸族や Sumbanese まで存在し、北ハルマヘラの Galela におよんでいる。他方で職業的鍛冶屋は、さらに東の Sasak, Babar, Aru にいたっている。しかし、今回の分布図から、製鉄—鍛冶の文化の全体像を確定するのは、なお困難である。

第1に、これらの技術には、簡単な金属器の加工、地金の輸入・加工から製錬術にいたるさまざまな段階があり、またときにそれに応じて鍛冶屋の存在形態もそれぞれであり<sup>6)</sup>、個別の民族誌の詳細な検討が必要である。

第2に、これらの技術の不在には、もともとそうである場合の外、新しい優秀な製品の輸入などにより、固有の技術の失われた場合も考えられ、この点も個々の事例の検討が要請される。今回の分布図では、Bukidnon, Ami, Puyuma に消失の例がある。なお、鍛冶の技術はニューギニア島西部までおよんでいる。かれらは明らかにマ

5) わが国のタタラ製鉄にもちいられた天秤フイゴも足踏みであるが、規模の大きな点やバネの原理をもちいない点などから、東南アジアの諸例に直接つながらないようである。なお、中国の5世紀の文献には、「歩治」すなわち足踏みフイゴが語られている。[ニーダム 1978: 505]。

6) 「職業的鍛冶屋」の定義づけは困難である。例えば中国南部の Achang の鍛冶屋は、季節的であるが、近隣諸民族の間をまわって鍛冶の仕事をする。このような例は、季節的かつ民族間の関係において、「職業的」と見ることができる。

レー系文化の波の影響であり、マレー式フィゴをもちい、鉄棒を原材料として利器を製作する。彼らの技術は大規模でなく、原鉱石からの製錬も行なっていないという [ANDREE 1884: 89-90]。

最後に真鍮・青銅鑄造 (2707) と金銀細工 (2708) についてであるが、いわゆる高文化の諸民族および中国南部から東南アジアにかけての山地民にひろく分布する。そのうち、金銀細工が、中国と東南アジアの間の諸民族にほぼひとしく見られるのにたいし、青銅鑄造は、ナガ・チン系諸族に比較的集中しているのが注目される。また興味深いのは、ボルネオが、こうした技術の分布の空白地帯になっていることである。このことは、先にあげた Dayak のフィゴが「もっとも基層的な単独型ポンプふいご」 [村上 1970: 34-35] である点とあわせ考えると、ボルネオが金属器技術に関し古い伝統を持っている可能性を示唆される。これまでのべてきた問題ともども、今後の課題としたい。